平成23年度鹿児島大学法科大学院

A日程法学既修者認定試験 試験問題（刑法・刑事訴訟法）

平成22年8月29日（日曜日）
13時00分～14時50分（110分）

答案作成上の注意

1. 「解答はじめ」の合図があるまで、この1ページ目を表にして、この問題冊子を開かないこと。
2. 問題冊子は、このページを含めて5ページある。
3. 試験用紙は4枚配布する。
4. 試験用紙の受験番号欄に受験番号、試験科目欄に試験科目（刑法または刑事訴訟法）を記入すること。
5. 試験用紙のNo. 欄に、試験科目ごとのページ番号を記入すること。
6. 白紙答案がある場合でも、すべての用紙に受験番号（横書き）、試験科目、ページ番号を記入して、必ず4枚すべてを提出すること。
7. 解答は、試験用紙の指定された欄に、横書きで記入すること。
8. 試験終了後、この問題冊子と下書き用紙は、持ちかえってよい。

刑法（配点100点）

設問1 以下の事例におけるXの罪責について論じなさい（特別法違反の点を除く）。
（60点）

《事例》

Xは、友人であるA宅において、Aに依頼されて覚せい剤を注射したところ、にわか
にAは苦しみだし、錯乱状態に陥った。Xは、かつて、覚せい剤中毒を起こした者が錯
乱状態に陥り、死に至った様子を見た経験があり、Aの状態はその時の状況と酷似して
いたことから、Aは高い確率で死に至るものと認識したが、救急車を呼べば覚せい剤の
使用が発覚することを恐れ、Aが死んでも仕方ないと思いつつ、A宅を立ち去った。そ
の後、Aは、A宅内で覚せい剤中毒により死亡した。なお、Aは、A宅において一人で
暮らしており、また、Xが、Aが錯乱状態に至った時点ですぐに救急車を呼び、病院に
搬送していれば、Aは、ほぼ確実に救命され得た。

設問2 以下の事例におけるXの罪責について論じなさい（特別法違反の点を除く）。
（40点）

《事例》

Xは、留守であったA宅に侵入して、金目の物を領得する意思でタンスや戸棚などを
物色し、金銭や宝石を発見して自己の懐の中に入れた後、A宅を退出してA宅から約1キ
ロメートル離れた自宅に戻り、自宅内でA宅から持ち去った金銭等を確認したところ、
思ったよりも収穫が少ないことに気づいた。そこで、Xは、もう少しA宅を物色すれば
金目の物が見つかるかもしれない、また、今ならばまだA宅は留守であろうと思い、A
宅に舞い戻った。しかし、Aは、既に帰宅しており、室内が荒らされていることに気づ
いて自宅の内外を確認していたところ、玄関先でAとXは鉢合わせとなった。Aは、X
を、自宅を荒らした犯人だと思い、逮捕しようとしたが、Xは捕まっては困ると思え、
Aに対し激しい暴行を加えた。

刑事訴訟法（配点100点）

次の事例を読んで設問に答えなさい。

《事例》

1. 平成21年12月20日午前1時30分ころ、鹿児島県警鶴丸警察署の警察官AおよびBは、パトカーに乗車して鹿児島市内をパトロールしていたところ、Xが運転する普通乗用車（以下、X車両）を発見した。X車両が一時的に蛇行したように見えたことから、Aらは、運転者がパトカーを見て動揺した可能性があると考え、無免許運転または酒気帯び運転の疑いを抱き、職務質問を行うことにした。車載マイクを用いて、X車両に対して停車するよう求めたところ、Xはこれに応じて歩道寄りの車線に車を停止させた。Aらのパトカーもその約2メートル後方に停車した。

2. X車両には、運転席にXが、後部座席にYが乗車していた。Aらは、XとYが、いずれも暴力団構成員風の風体であるとの印象を抱いた。Aらが、運転免許証の提示を求めたところ、Xはこれに応じた。このとき、Xが酒気を帯びている様子はなかった。Bがパトカーに戻り、Xの免許証に書かれた情報を無線で照会したところ、Xには覚せい剤取締法違反と大麻取締法違反の前科があることが判明した。Aらは、XとYが自動車内に違法な薬物を隠匿しているのではないかと疑いをもち、XとYに対して車両の中を見せるように求めたが、XとYは、これを拒否して、帰らせてほしいと要求した。

3. Aらは、午前2時20分ころ、無線で応援の警察官の派遣を要請した。午前2時45分ころまでに、2台のパトカーが現場に到着し、制服着用の警察官計7名（AとBを含む）がX車両の周囲に集った。X車両の急発進を防止するため、応援で到着したパトカーが、X車両の約1.3メートル前方に、同車両よりも約60センチメートル右側に出た位置に停車した。

4. Aらは、Xに対して、車両内の検査に応じるとともに、エンジンを切るよう繰り返し説得したが、Xは、運転席側の窓を開けてAらとの会話には応じたものの、「見せる必要はない。CDを聴いているのでエンジンは切らない。」と言って、いずれの要請も拒否して、その場から退去したいと述べた。しかし、Aらは、このままXとYを解放してしまえば、彼らが所持しているかもしれない違法な薬物が、他の者へと渡ってしまう可能性が高いし、場合によっては、Xらがこの後に違法な薬物を使用して自動車を運転する危険があると考え、「何もないのであれば、車の中くらい見せてくれてもよいではないか」と、粘り強く説得を続けた。

5. 午前5時ころ、Xはあらためて、「もういいかげんにしろ。Yの体調が悪いので、この場から解放してほしい」と強く要求したが、Aらはこれを認めず、検査に応じるように引き続き要求した。このとき、複数の警察官が、懐中電灯を点滅させてX車両内やX

の顔面を照らすなどし、また、助手席や運転席の窓を拳で小刻みに叩きつけた。

6. 午前5時29分ころ、Xは、現場から離脱することを決意した。Xは、車を約1メートルほど後退させて停車したのち、すぐにハンドルを右方向に切り、ブレーキを緩めながら、ゆっくりと前進させた。このとき、なおもX車両に寄り添いながら運転席のXに所持品検査に応じるように説得を続けていたBの右肘にX車両の運転席側ドアミラーが接触し、Bはその場に転倒した。Xは慌てて車両を停止させた。

7. Bは立ち上がると、X車両のドアミラーが自己の右肘に接触したことから直ちに公務執行妨害罪が成立するとして、Xを車両から外に連れ出し、午前5時35分、同罪で現行犯逮捕した。続いて、Aらは、この逮捕に伴う捜索として、X車両の車内を捜索し、後部トランクルームに入っていた紙袋の中から覚せい剤を発見した。そこで、直ちにXについて覚せい剤取締法違反の罪でも現行犯逮捕の手続きをとり、これに伴う差押手続として、午前6時20分、上記の覚せい剤を押収した。のちにXは、①公務執行妨害罪、②覚せい剤取締法違反の罪で起訴された。

設問

本件で差し押さえられた覚せい剤の証拠能力について論じなさい。